展 景

季 刊

No.85

Spring 2017

季刊　展景 85号

目次

津軽野をゆく〈短歌〉……結城　文　4
寒気〈短歌〉……市川茂子　6
霜柱〈短歌〉……小野澤繁雄　8
津軽伝説Ⅰ〈短歌〉……河村郁子　10
冬景色〈俳句〉……谷垣満壽子　12
潑剌と〈俳句〉……新野祐子　14
雪〈短歌〉……布宮慈子　16
Mさん〈短歌〉……丸山弘子　18
東京歌会（第四十九～五十一回）……20
買い物帰りに……松井淑子　26
〈那須通信 30〉私の散歩……加藤文子　28
〈薫風颯々 5〉馬栓棒と社会の窓……神村ふじを　32
忘れぬうちに（下）……河内愛子　36
対詠　ごきげんいかが？　PART 61……小野澤／布宮／河村　46
前号作品短評A……50
前号作品短評B……52
エッセイ教室「清紫会」の作品より
目の前が変わる……市川茂子　54
年始がすぎて……小野澤繁雄　56
「清紫会」だより……59
無二の会短信……60
編集後記……64
今号のイメージ／フキノトウ

津軽野をゆく

結城　文

同じ年に生を受けたる縁（えにし）にてかたみに歌を詠みて読みあふ

古希の年の発足をして十年余そのうち三人（みたり）はすでに世になし

十月の末の津軽野　収穫を終へて乾ける田の面のつづく

津軽野はまことに広し刈田の上ただべうべうと風のゆくなり

赤き葉はあくまで赤く黄なる葉はあくまで黄なり津軽の里山

頂きの鋭く尖りし岩木山　雲なき真昼の空に清（すが）しき

紙・木・竹まこと素朴な素材もて作られし「立ち見ねぶた」の迫力

いまだ見ることの得ざりし「ねぶた祭り」五所川原ねぶた会館にしのぶ

ていていと巨木直ぐたつ長勝寺――津軽藩主の五基の霊廟

津軽野は「みちのく」すなはち「道の奥」かぐろき海に道は絶たれつ

寒　気

市川茂子

冬空に出でし下弦の月近く金星は放つ恋のシグナル

方言のブームというも浮かび来ず頭かかえて言葉をさがす

方言を忘れていしが標準語も訛り混じりて年重ねたり

早朝を出で道すがら知る人の一人に会いて言葉を交わす

呼鈴の音かぞえつつコタツより漸く立ちて戸を開けにゆく

木枯しの吹く音やめば静けさに仕舞仕度の思いめぐらす

宿業（しゅくごう）をかかえながらに年古（としふ）りてやがて自然に思いを託す

年明けてつづく晴天の初詣で清新な陽を浴びてゆくなり

白梅の匂う朝（あした）の路地をゆく鋭い寒気に顔晒しつつ

酉年の幸先の良き思いなり晴天続き大寒に入る

霜柱

小野澤繁雄

みちの片土つながりに霜柱通学班にすでにも踏まれ
三ツ辻に傾いてある石仏凭れてひとつ牛乳瓶がある
「いっちゃんいくよ」は球がいくよ休み朝も早いのはこどもたち、年より
そうはまだ育たぬ霜の柱なれ団地棟下草がひかって

信号が青になりそう三人の中学生が突っ込んでくる
おそろいの色は青その上に犬連れている人は年よりに同じ
庭木々のひとつのような電柱にこれも庭木の杉がよりそう
竹林を挟んで畑の人の声その前にもや犬の声して
冬至日もたちまちすぎてみるところ家庭菜園に九番本休み
行儀よくすわりなおしている犬が軒下に居りそれをみている

津輕伝説（Ⅰ）鬼神伝説

河村郁子

新青森駅より間もなく岩木山（やま）裾野広ごる美景を拝す

刈田なる津軽平野を加護なされ此度（こたび）はわれらを迎ふるごとし

岩木山ふもとの阿曽部（アソベ）の森のなか伝説あまたな鬼（き）神社御坐す

そのむかし弥十郎とふ農夫ゐて山の大人（おほひと）（＝鬼）と睦みてゐたり

弥十郎より水の不足を聞きたれば鬼は一夜に逆堰作りき

流れ変へ田を潤して崇められ地名は鬼神堰と鬼沢

仕事の場を覗かれしゆゑおほひとは鍬と蓑笠残し去りたり

鬼神社の御神体には鍬と笠　篤く祀られ語り継がるる

今もなほこの地のならはし節分に豆を撒かぬと守られてゐる

奥津軽の鬼は優しく住む人の篤きまごころ伝説に知る

冬景色

谷垣滿壽子

宅急便届きし朝初(あした)しぐれ

「冬景色」口ついて出る小六月

水涸るる小流れの音絶えしまま

梟(ふくろう)の去りて風あり農の庭

潔く己を曝す冬木かな

冬暁のラジオ流せる昭和歌

冬木の芽焦らず慌てず夢ひとつ

むかし富士みえし小径や冬晴るる

凩(こがらし)や辿りつきたしポストまで

口ずさむ小学唱歌柚子湯匂ふ

潑剌と

新野（にいの）祐子

好きなのは金柑・名誉なきディラン
ラガー追うそのまなざしの一直線
今年米湯気立つ中に潑剌と
暮早しもう君の尾が生えて来し

さようなら霙（みぞれ）消えゆく窓越しに
登頂は親子三代初日浴ぶ
初夢や老父母寝せて猫寝せて
平等に解けてゆくなり雪達磨
ポケットに出生届霰（あられ）ふる
一枚の絨毯一枚の果し状

雪

布宮慈子（やすこ）

電車より見ゆる霞城（かじやう）公園の土手は真白に静まりてゐる

雪の野を飛ぶ一羽なる青サギよいづこより来ていづこへ行かむ

十代に思はざりしを石（いそ）の上（かみ）ふるさとの山われにやさしも

薄雪の疎林を右にカーブしてゆけば見えくる月山、葉山

月山を正面にして走行す語りかくるもの何かある吾（あ）に

雪塊のうへに雀はあそびゐて鶺鴒（せきれい）せはしく道を歩めり

地下道にムーミン谷ありその謂れ誰に訊きても確（しか）と分からず

離れねば見えぬ蔵王の山々が入り日を浴びてかがやく時間

俄（にはか）雪、粉雪、根雪、牡丹（ぼたん）雪、綿雪、粗目（ざらめ）雪、忘れ雪

雪のなか飛びくるはカラスなまなまと近づきやがて白に紛るる

Mさん

丸山弘子

公園は梅の香に満つ「みちしるべ」「冬至梅」などよき名を持てり

千両の朱き実鳥らの餌となり正月の庭いろどり少なし

こんなにも寒かつたのか厚く張りしメダカの瓶の氷引き上ぐ

陽あたりのよき内科医の門先に鉢のノボタンながく咲きをり

何を銜へ歩む烏か駐輪場の屋根の波板音の激しき

床に落ちしゼムクリップ雫のごとしよと短歌に詠みたる女(ひと)思ひ出づ

夫の一周忌むかへる友の体重の戻りしを聞き共によろこぶ

われに気づき犬は一瞬止りしが主人を追ひて朝を駆けゆく

グループホームに入りて安定したるとふ家族の便りにこころ安らぐ

添へられし食事会の写真Mさんの穏(おだ)しき顔に安堵するなり

東京歌会（第四十九回）

平成二十八年十一月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十四首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

野の川に名のある橋や赤刈橋渡る人日に両手で足るか　小野澤繁雄

名のある橋や、は名があるだけで驚きという小橋。結句、両手で足るか、がすぐには解らない。十人に足りないだろうか。日に渡る人、としたらいいなど下句は動くかもしれない。

荷解きをする店先にデンファーレの一束買いて色を楽しむ　市川茂子

にとき、でなく、にほどきと読みたい。表記も、荷ほどき、でいいと。デンファーレの名称がいい。今はいろいろある。一、二句の具体。色を楽しむ、よくわかる。

病名は違えど君はたゆたゆと歩みゆくなり別れきしなり　大石久美

ちがえど、でなく、たがえどと読む。作者も歩行に障りがあるが、病名は同じでないというところ。君との間柄にはある親和があって、残るものがあるのだ。

くちびるを真っ黒にして食（とう）べるは娘が手造りの烏賊墨パスタ　林　博子

娘は、こ、と読むか。上句、くちびるを真っ黒にして、の直接性。烏賊墨パスタはしられているが、どこか新しく、娘の世代のものかもしれない。こういう関係もある。

小学校の修学旅行の湯野浜（ゆのはま）に砂を踏みたり五十年経て　布宮慈子

前の歌から、湯野浜は同じ庄内（山形県）にあるようだ。文字通りには温泉のある浜辺。三、四句の、湯野浜に砂を踏みたり、がいい。五十年経て、懐かしさにも時間数がある。

松傾く小田原城址あにいもと本借りにいくいま郷土文化館　中川禮子

小田原城址、に図書館（室）のような社会施設ができていて、そこに小さな兄妹が本を借りにいっていた。そこが、いまは郷土文化館になっている。三句、兄さんと、でもよいところ、もう遠い世のことのように、あにいもと、という一つの絵をみせている。

蕪蒸の蓋をとり上げ湯気と香に幼ごころのかへるたまゆら　河村郁子

かぶらむし。湯気と香に、と丁寧に云っているところ、工夫のある歌と。ごちそうだったか。

東京歌会（第五十回）

十二月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十三首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

暮れ残る冬空に浮く三ケ月の上にまたたく宵の明星　　市川茂子

風が止むと空が澄み切ってみえてくるものがある。季節と時間帯もある。三ケ月は余りみない表記。月も金星もうごいているが、その位置関係がある。

白内障の手術を受けし年齢に一〇八歳ありしと眼科案内は　　小野澤繁雄

作者は眼科を受診したのか？　報告するような手つきの歌だが、高齢者の手術について少し意見を交換することになった。一〇八歳には今の時代もある。

緩やかに冬に入りゆく密けさや癒えなん人の背中のまるみ　　林　博子

癒えようとしている人、まだ癒えていない人。声高なやりとりも少ないところ。病みあがりの人はそう察知されてしまうところがある。親密な空気感がある。

乗りかへてバス降るるとき運転士とことば交せば教へ子なりき　　中川禮子

乗りかへて、がやや曖昧。乗りかへし、か。あとはよくわかる。教師時代があった。今も地元に住むのか。何か、ことばを交わすことをした。よかった、うれしい。

箱車押して歩めるわが前に猫いて犬いてわが足つづく　　大石久美

箱車は手押し車のことで、楽だという。足に不自由をかかえている。猫も犬も歩道にいて、そういう人を注視してもいるようだ。置かれている情況がわかる。

白鳥の数おほければ庄内の人はすなはち五月蝿いと言ふ　　布宮慈子

一首目の歌「内陸の人はしみじみ聞きをらむカウカウと来る白鳥の声」とセットで読みたい。内陸の人、しみじみ、と、この歌の、庄内の人、五月蝿い、はことごと対比的で面白い。手練れの歌と。一、二首目と、この順に読みたい。

花首を挽ぎて青年が配りくる葬祭場の昼の寂(しず)けさ　　大石久美

間違って二セット送られてきた歌の一つ。花首を挽ぎて、のリアル、青年が配りくる、さまの無感情さ、など。

東京歌会（第五十一回）

平成二十九年一月十九日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者六名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。

自転車隊のようなる音にきているは宅配便の女性（ひと）らこれから配達か　小野澤繁雄

風景として現在。必要な材料としては、自転車隊、宅配便の女性ら、を残したらいい。破調で、整理のしかたに難がある、と。団地などでは、敷地近くで仕分のような作業がなされ、あとは自転車に小振りなリヤカーを付けたもので小分けに配達している姿をみる。

尾長鶏の刺しゅうの額を取り出だし年改まる部屋に飾りぬ　市川茂子

酉年の正月準備。さりげないが、心の動きが感じられる。額装しておいたものか。年改まる部屋と尾長鶏で、酉年の新年が示唆される。

グループホームに入りて安定し居るとふ家族の便りにこころ安らぐ　丸山弘子

グループホームは現在だが、共同生活をするらしい、など意見の交換があった。ホームに入った当人の（同居はしていなかったか）家族からの便り、なのだ。その以前の状態より安心できるような環境がえられたということ。よく伝えている。

ベランダの野菜ひと夜に凍りつき捨てたる古い毛布を思ふ　布宮慈子

泥がついているようなものをとりあえずベランダに出しておくようなことはある。この野菜は二首目の大根か。雪国には屋外に保存するようなやり方もあるようだが。下句の（もってゆきかた、）意外性、が好評だ。

今朝よりは母なきイヴと鳴くならずや厨に小さき雀入り来る　中川禮子

母なきイヴ、つまりは娘、永久に母をうしなった子。小雀が、在りし日の母の所在の厨に鳴いて入ってくる。じぶんも今朝からは母がいない、と鳴くことになるのか。痛切。英訳もある。

（小野澤繁雄）

買い物帰りに

松井淑子

うちからスーパーマーケットまでは、徒歩で片道約三十分はかかる。この距離を重い買い物袋を提げて歩くのは、近ごろさすがにしんどくなってきた。だから、以前なら一日ですませていた買い物を、いまでは二、三日に分けて行っている。

買い方にもくふうが必要だ。軽いけど嵩張るもの、卵のように毀れやすいもの、ボトル入りの調味料のような重いもの等々……買い物をしながらそれらの組み合わせも考える。たとえば大根とサラダ菜と椎茸は一緒に買っても、大根とキャベツとカボチャは一緒には買わないとか。雨の日もむろん買い物には出掛けない。

その日に買うべき品物はお醤油と味醂だった。どちらも一リットル入りの大きなボトルをスーパー備え付けの籠に入れながら、お酢とお砂糖がほとんどなくなりかけているのを思い出し、これも入れる。腕にずしりとくる。これ以上は買えない。

品物を籠から買い物袋に移し替え、通りに出る。いいお天気だ。前夜の強風のせいで歩道一面に散り敷いている落ち葉が、わずかな風でころがったり、小さな渦を巻いて舞い上がったりしている。いつもの通り道の、病院わきのゆるい坂道にさしかかると、私はわざと、「えっちら、おっちら」と小声で掛け声をかけながら登りはじめた。上から下ってきた白髪でくすんだグリーンのコートをきた女の人が、途中で立ち止まって、私のほうを見ている。かなりの高齢者だ、私より年上だろう。そう思いながら近付いていくと、その人は声を掛けてきた。

「風が出てきましたね。どうぞお気をつけて、おだいじに」

「ありがとうございます」

と私はにこやかに返事を返したものの、この人はこれを言うためだけにわざわざ私を待っていたのだろうか、声を掛けたくなるほど私は年寄りっぽく歩いていたのだろうか、とがっくりする。

同時に、しばらく前、あとからバスに乗りこんできた高齢らしき女の人に私が座席を譲ろうとしたら、その人から、

「あら、奥様のほうだって……」

と言われたのを思い出した。その人も、いまの私と同じように、内心がっくりした気分を味わったにちがいない。

家に帰って、その日の買い物の重量を測ったら三キロ強であった。これが、私が無理なく持って歩ける重さの限度だな、と思ったことであった。

〈那須通信30〉

私の散歩

加藤文子

今年最後の展覧会が終わり、盆栽も温室へ取り込んだ。空(から)になった外の棚のよごれもタワシをかけてきれいにした。

ひと通り冬を迎える準備ができた。

年賀状のあて名書きをはじめるには少しはやいので、再来年のカレンダーの制作にとりかかる。

盆栽の仕事の少ない冬のあいだにできることで、楽しくて充実感のあることを考えていたら、カレンダーが浮かんできた。

そのカレンダーづくりも、今回で六度目を迎える。盆栽や庭の風景などを収めた日々の記録や、連載用に描いたイラストからイメージに合ったものを選んで十二ヵ月分構成する。

はじめは要領がわからずドタバタしてばかりいた。最初のカレンダーは、イラストと盆栽の画像がうまくコラージュできなくて、暦が読みづらくて実用性に欠ける、そんなご指摘も頂いた。

毎年改良を加えながら制作をつづけている。
画像を選ぶには苦手なコンピューターと対峙しなければならない。
年代順に分けたたくさんの画像を見ているうちに、肩がはって頭がボォーッとしてくる。我慢して続けようとすると苦痛になる。我慢でいるのも良くはない、さりとてやめる気もしない。
そんな時、夫の散歩を思い出す。
夫が散歩をするように、私もコンピューターと付き合ってみるのはどうだろう。
一枚一枚に写し出された折々の風景をながめてみようか。三十分、いえいえ二十分、もっと短くてもいい。
冬のあいだにやり終えることができなければ、再来年のは休めばいい。そのくらいの気持ちでのぞんでみよう。
カレンダーのために選ぶゾォという力みもなくして散歩の気分ですすんでみると、楽しくなった。目的の枠をゆるめて画像に目を通してみる。するといろいろなことが見えてくる。
デジカメで記録をはじめたのは、二〇〇九年のこと。カメラにふれたことのなかった私は、ピントや光の調整をするのが精一杯。背景も繁雑で、構図まで気がまわらない。何を撮りたかったのか、今では皆目見当のつかないものもある。
木立を見上げて枝先の向こうの空を写したものなど、とりとめがなさすぎる。でもあの時は何かに反応したのだろう、どこかに心動かされたのだろう。
六年たったこのごろ、わずかながらましになったのか、きれいと思った瞬間のうっとり感がそのまま撮れているものもある。
そのひとコマから写した時の空気や自分自身までもが鮮明によみがえってくるから不思議だ。
夕方最後の光に写し出された温室のブロンズの情景、葉っぱや枝先の輝き、大好きなあこがれの世界だ。
それから、門扉から玄関に通じる野草の盆栽が載る鉄のスタンドのあたりは繰りかえし撮っている。
特に午後の光のベールに包まれて風に揺れる風知草やリンドウ、苔におおわれた中からゲンノショウコやユリが伸び出して共生する大きな野草の盆栽など、何度見ても飽きない。ついシャッターをきってしまう。
画像の物語は尽きない。すべての植物が変化しつづけているという証(あかし)も伝えてくれる。年を追うごとにしなやかさを増して、それぞれが少しずつやさしい家族のようになっている。
記憶からこぼれ落ちた事象に呼び覚まされて、手が止まったり、思いが留まったり、行き着く所がわからなくなっている。

〈薫風颯々 5〉

馬栓棒と社会の窓

神村ふじを

長らく教育に携わってきたので、子どもたちの様子に目がいってしまう。退職してから近くの小学校に読み聞かせボランティアに行っているのも、子どもたちに関わっていたい、どこか気になる、そんな気持ちがきっとあるのだろう。この気質というか性分というのかよく分からないが、いつからこんなふうになったんだろうと反省しつつ、いそいそと読み聞かせに出掛けていく自分がいる。

最近の子どもたちの様子と自分の育った頃の時代とついつい比べてしまうことがよくある。物質的な豊かさは比べものにならない。特に感じるのは子どもたちの普段の服装である。

子どもたちの服装はずい分変わった。みんな同じようなものを着ている。好きなＴＶ番組の一つにＮＨＫの「鶴瓶の家族に乾杯」がある。それを見ていると、全国津々浦々、普段着の小学生たちが時折出てくるが、山形の子も北海道の子も鹿児島の子も本当に変わりがない。全国的に同じなのである。個性がないと言ったらそれまでだが、今の子どもたちの服装のお洒落さ加減と言ったら、

自分の子ども時代とは雲泥の差である。お洒落のおの字もなく育ったから、ファッションなどにはとんと無頓着である。

全国展開を図る衣料量販店の存在、物流の進展、経済効果目覚ましく、着ているものを見る限り地域性などまるでない。日本は単一民族の国家だとよく言われる。顔立ちだってそんなに違わない。奄美、沖縄の人たちは何となく彫りが深く海を感じさせると思っていたが、十人十色で、ＴＶで見る限り、彫りの浅い顔だって結構いる。

ただ、話し言葉に表れる方言、イントネーションの中にその地方地方独特の言い回しがあり、そこに地域性を感じることがある。

地域格差、地方格差は、見る限りにおいては、そんなに感じられなくなった。高度経済成長の名の下、日本は押し並べて標準化、平準化の道をひたすら歩んできたように感じる。

最近、経済格差、貧困の問題がよく取り上げられているが、標準化、平準化の裏に隠れた目に見えない部分が顕在化してきたということのように映る。

ところで、私の子どもの頃のズボンに付いているそれは、チャック（ファスナー）ではなくてボタンだった。股のところに切り込みがあり、縦に二つか三つボタンが付いていた。

その当時、それをなぜか「マシェボ」と呼び、「お前な（の）マシェボあいっだ（開いてるよ）」面白半分で友だちをからかうと、例外なく股のところに手をやったものだった。このマシェボのこ

とを上品に言えば、（こと股間に関わっては上品も下品もないと思うが……）「社会の窓」のことである。

股ボタンがチャックやファスナーに代わっていくとともに、いつの間にか不潔そうでだらしのないマシェボはあまり見かけなくなったが、「社会の窓」という言葉だけは生き続け、今でも通用している。が、密閉タイプのファスナーといくばくかの光明のある股ボタンでは決定的に違っていたのだが……。

このマシェボは江口文四郎氏によると、「馬栓棒」のことだと言う。

「ましぇ棒」ということばがある。漢字で書けば「馬栓棒」となり、どこにも通ずることばらしいが、村では「ましぇぼう」と発音している。畜舎（かつてはおおかた母屋の一部だったが）の入口に取り付けられる頑丈な棒のことである。（中略）等間隔に一列に並んだ股ボタンは、ましぇ棒に酷似している。

江口文四郎*著『新村のことば』（昭和五十五年、やまがた散歩社刊）

牛馬といっしょに住んでいた頃、逃げられないように馬屋の入口に棒を掛けた。つまりこの馬栓棒はやんちゃな牛馬と社会を隔絶するために仕掛けられた唯一の棒なのであった。

私はと言うと、確認しながらマシェボを閉める。やんちゃな息子を押しとどめるためにマシェボを閉める。やんちゃな息子の覗き見る窓は暗くて寒い。明るい外へ出たがる息子。その窓をみんなは「社会の窓」と呼んだのであった。

*江口文四郎は、一九二八（昭和三）年、山形市郊外の村木沢村生まれ。山形師範を卒業後、山形市周辺の小・中学校で教鞭を執った。「山形文学」同人。一九八八年没。

（追記）

「社会の窓」について次のようなことが分かった。一九四八（昭和二十三）年からＮＨＫが社会の内情を暴き出すという内容の「社会の窓」というラジオ番組を放送した。この番組名が大事なものが隠された場所という意味で社会的に使われるようになったらしい。「社会の窓」は今でも通用する言葉として市民権を得ている。そう考えると、ラジオの番組名が社会に与えた影響の大きさを感ぜずにはいられない。

忘れぬうちに（下）

河内愛子

3　『太平洋戦争を生きた少女たち』（尚絅卒業生の記録と追想）

少女時代の戦争体験を集めて本を作ろうと、高澤計以さんが言い出したのは『根づいた花』刊行（二〇〇三年）とほぼ同時だった。小野寺正美さん、木村淳子さん他同級生数人も賛成した。ぶつくさ言っていたのは多分、親しい友人の中では私だけだったと思う。できれば忘れてしまいたい体験をわざわざ書いてくれる人が何人いるだろう。原稿が集まったとして、費用をどこから出す？　売るとは言っても、売れなかったら赤字と在庫は誰が引き受ける？　金持ちの同級生など、どこにもいない。しかし、計以さんはびくともしなかった。彼女は全所持金をはたき、パソコン打ち、友人・昔の先生方への原稿依頼もみな引き受ける覚悟を決めていた。

気がつけば船は港をとっくに滑り出し、計以さんのめげることない説得のおかげで、原稿は順調に集まり始めた。書けませんと言われれば、彼女は電話で聞き書きもした。

計以さんには糖尿がある。日中は主婦の家事の他、畑までしていたから、本作りは夜中の仕事。あの一年間、彼女は何時間眠っていたろう。

最後の打ち合わせに、何人が何回集まったかは忘れてしまった。木村淳子さんがおぼえていると思う。十人から二十人もいたか。印刷費・部数・値段・タイトルのこと。記憶にあるのは、きわめて民主主義的にみんなが言いたいことを言い、計以さんはほとんど黙っていたこと。費用は集まった全員が均等に負担することになった。どのぐらいの負担だったかは、実務を担当していた小野寺正美さんがおぼえていてくれるはず。

二〇〇三年十二月、おそるおそる刷った千部、定価千円は、あっという間に売り切れた。本屋に頼んだわけではなく、関わったみんなが責任感で一生懸命に売ったおかげである。二回増刷した。素人の主婦達の初仕事としては成功だった。一人一人の出資金は戻らなかったが、赤字は出なかった。母校と地元の図書館には何冊かずつ寄贈したから、十年以上経った今、読みたい人が出てくると、図書館から借りて下さいと私は言うことにしている。数年後、計以さんは急死した。地味な、口かずの少ない友達だった。熱かった彼女の反戦のこころざしだけが、今も生きている。

二〇一四年二月、用事で上京した私は、久々に天野文子さんに会うことができた。彼女は、南部

バプテスト教会の元牧師夫人で、私達と同年。七十年前に広島で被爆された。東日本大震災のあとの電話の声が忘れられない。

「福島の原発事故のあと、くやしくて辛くて、一ヵ月起き上がれなかったの。行かなければならない仕事があって、ようやく起きたのだけれども……」

本当に辛そうだった。あなたがどうして今度もそんなに辛い思いをしなければならないの、と心で思うしかなかった。

食事に座ると、彼女はさっそく十年前の私達の冊子をとり出した。あの時、信者の同窓生が送ってあげたものだった。ページをめくりながら文子さんは面識もない一人ひとりの消息をなつかしそうに尋ねられる。知る限りを話す。おたがいの現在のことも。別れ際、心をこめて言われた。

「こんなに良い本を、どうしてちゃんとした出版社からお出しにならないの?」

びっくりした。そんなこと考えた人は一人もいない。まして十年以上もたった今、私達はみな八十代半ば、計以さんももういない。でも同年の文子さんは、今も証言者として求められれば、どんな遠方であろうと核の残虐、戦争の悲惨を語り続けて止まない。いつものことで私は恥ずかしかった。原発再稼働反対の票が二つに割れた翌日の東京都知事選についても話す時間は残らないまま、夕闇にきらめく大都会の灯りをうしろに、私達は別れた。

あの日から私は時々、十年前にみんなで作って一冊だけ残った本を開いてみる。時の権力者、東條内閣の閣議決定で教室から追い出されたものの、敗戦が早かったため、尚絅（女学校、仙台市）生徒の私達から、さいわいに死者は出なかった。したがい、怒りも弱いのである。とはいえ、私が住む山形市のすぐそばの山形県立第一高女（現、西高）から神奈川県川崎の工場に動員された生徒のうち、十人以上が空襲で命をうばわれている。西に向かえば、敗戦目前の八月六日。広島市では早朝、工場や疎開地跡片づけに向かって歩いていた中学生・女学生のうち、四千人が原爆死した。八月九日の長崎市の状況も同じだったと思う。勤労動員中に犠牲となった少年少女の総数は慰霊碑によれば、一万有余人とのことである。

一方、敗戦当時、日本ではなく異国にあった同窓生の中に、大先輩にあたる小原かつさん、私達と同年の長池秀子さん、八田さと子さんがいた。計以さんの粘り強い説得で、ついにペンをとった秀子さんの「いつも神様がご一緒よ」と、さと子さんの「忘れられないこの痛みを」は、二人の切り抜けた体験のものすごさに圧倒される。

「忘れられないこの痛みを」（八田さと子）より要約（河内）

一九四五年八月、戦争が終結して一時間もたたぬうちに、さと子さんの六人家族が住むハルピン

市の街路を、中央に女性兵士の立つ巨大なソ連の戦車が進んできた。その日のうちに日本軍は武装解除され、兵士達は全員ソ連兵に連行された。さと子さんの父は、生きて帰国のすべを失った家族全員の自決を決意する。奥の一室がその場所。タンスが前に出され、わらが積まれる。さと子さんは死にたくなどなかった。

しかしその夜、連行された兵士の一人が脱走してくる。他人を巻き添えにはできない。決行は延期された。翌日は獰猛（どうもう）な顔つきで自動小銃を肩にしたソ連兵三人が入ってきて、手当たり次第の略奪、さらに次の日はソ連の将校が通訳を連れて来て、二時間以内に家を明け渡せと申し渡す。やっと持ち出した荷物も、途中ですべて略奪され、家族は着の身着のままになった。ハルピンは北海道の北端よりさらに北。さと子さん一家はその冬、どのようにして酷寒をしのいだものであったか。各所で日本人が人民裁判と称して市中を引き回されている時、父親を外で働かせることはできなかった。母は病弱。生活は十四歳のさと子さんの肩にかかる。女中にウエートレス、工場の女工と必死に死に物狂いで次から次へと働いた。生活は困窮をきわめた。

「いつも神様がご一緒よ——私の八月十五日前後」（長池秀子）より要約（河内）

同じ頃、やはり十四歳の秀子さんも弟と二人で冬のコート、毛布、食器、目覚まし時計などを背負い、親の一足先に避難所に向かっていた。秀子さんの母が小原かつさんである。

「秀ちゃん、頼みましたよ。行き先は公園の中の兵士ホーム。私も折を見て逃げます。お父さん、あとは頼みます。神様がご一緒ですから」

すでに日は暮れ、外は真っ暗闇。そこに子供達を送り出した母の言葉だった。ガリガリ進んできた戦車から道路脇の草の茂った堀にかくれ、ようやく避難所の見える所にきた時、ついに少女はソ連兵に捕まってしまう。弟を助けを求めに走らせるが、前からも後ろからも銃口を突きつけられた。銃口を手で引き寄せ「撃ってください」と彼女は二、三度大声で叫ぶ。その時、朝鮮人か中国人の通訳が「歳はいくつですか」と尋ねた。とっさに「十一歳です」と答えた時、一人の大きなソ連兵士が背中を押し、そこから助け出してくれた。その時まで恐怖に震えることはなかった、と秀子さんは書いている。

以下、長池秀子さんの文章を抜き書きする。

兵士ホームで夜が明けるまで父と母を待ちました。でも現れません。目覚まし時計のカチカチがやたら大きく聞こえ、すぐ外では自動小銃のバリバリバリ、バラバラバラと発砲の音が絶えず、誠に不安な一夜を過ごしました。母も家を出たあとは、町内の防空壕で一夜を明かし、母を逃がしたことで父は撃たれることになり、これまた、その寸前に逃げおおせ、夜中の暴徒の中にまぎ

れ、母を助け出して無事私共と合流しました。これが二十六日早朝です。

住宅街を追われた私共は支那街近くの赤レンガ館の旧将校宿舎に一夜を過ごしましたが、ここでの夜が一番陰惨で恐ろしい思いを致しました。私共は髪を切り落としました。階下では引き裂かれるような叫び声が何度も聞こえて、誰かが連れて行かれたものか、引き戻されたものかは全く判りませんでした。（略）

〈悲しみ秘めたひな祭り〉「『公守嶺』――過ぎ去りし四十年」（満州の学校の仲間との文集）より

敗戦翌年の三月ごろ私の家族は、公守嶺（こうしゅれい）の藤井菓子店の二階に住んでいた。そのころ、母は満鉄病院で付き添いをしていたTさんのたっての依頼で、ソ連兵の相手をする女性のドレスを何枚か仕立てた。

ある時、この気っぷのよいおばさんが、また訪ねてきた。そして洋服の端切れで細工をしていた私どもに「この服の子が昨夜、ロスケにピストルで殺されてしまった。奥さん！　本当にかわいそうな娘だよ」と言って泣いた。

その夜、母と私は深い朱に紺で細かな菊が織り込まれているお召しのその布で女雛を、黒ちりめんで男雛を、他三人官女と五人囃子（ばやし）など十体の小さな雛を作った。翌朝、白菜の芯から育て上げた黄色い菜の花を添えた。この哀しい雛たちを忘れたことはないが、華やかな緋毛せんの上に

飾りきれずにきた。むしろお彼岸に供養してやるべきであったとこの年になって思うこの頃である。（一九七〇年四月）

この中のTさんは天理教の熱心な信者で、自分の郷里に教会を作るためにと、満州まで出稼ぎに来ていた人でした。母が入院した折に世話になり、その後休日にはよく遊びにきていました。私どもの街にソ連兵が入ってきた時、この人はどういうわけか兵士の相手役をする女性たちの母親役を買って出て「お母さん、お母さん」と慕われていたようです。Tさんが我が家にきても、母はいつも忙しく、バザーのための服やエプロン縫いのミシンをガチャガチャ踏んでいたのを見ていて、ドレス仕立てを頼めないかと思いついたようでした。

この時から半世紀以上の年月がたちましたが、この雛を現在も手元に持って居ります。この人達の何人が無事生きて日本に帰されたものか、帰れなかったものか、知るすべはございません。でも、その後の人生が過酷であったことは充分に想像がつきます。ああ、この人たちがいなかったなら、私たちの今は、なかったかもしれません。日本兵士の相手をさせられた女性が、日本の敗戦後、即ソ連兵の相手をさせられた残酷な犠牲を、このやり切れない犠牲の深さを思う時、今なお胸の痛むことしきりです。（後略）

ソ連兵の性暴力はすさまじかった。今も世界に続く戦争犯罪である。秀子さんとさと子さんのペ

ンはどれほど心が重くとも、それらの事実を素通りしていない。短いけれども、さと子さんも書く。貴重なありがたい証言である。

以下は八田さと子さんの文章である。

病弱で働けない母が、「松花江に末の妹と身を……」と考えていたのを知り、頼みに頼んでやっとすぐ下の妹と二人、小さな化粧品工場に雇ってもらう。だが、二ヵ月で私だけとなり必死に働いた。

翌年十月帰国となった。その間の生活は書くには余りある。引き上げの葫蘆島港までの悲惨さ、無蓋車に乗せられ、途中何回となく「女を出せ」とおどされ、その度にいつも身を挺してくれたのは、年長の職業婦人であった。

戦争の犠牲者は限りなく、限りなく失われて行った。奥地、開拓団の方達の悲惨は言葉を絶する。語り伝えることの難しさを思わずにはいられない。

第二次大戦末期の一九四四年、四五年、私達は国家による「学徒勤労動員令」の命じるまま、北海道から沖縄、満州にまで拡がる地域の中学生、女学生と共通の時間を生きていた。ここに登場して頂いたKさん、Gさん、スティブンスさんと私にかみついたSさんともう一人、日記を残した棟方郁さん、原稿浄書をしてくれた嶺岸久子さん、いのちをすり減らして文集を作った高澤計以さん、十人以上の先生と友達、文集作りを助け、懸命に売ってくれた小野寺正美さん、木村淳子さんと仲間たち、貴重な証言を書き残した長池秀子さん、八田さと子さんは、小原かつさんを入れても十二人のお名前しか書けなかった。だが彼女たちの背後には、各学年を合わせると数百人の同級生がいる。いずれも尚絅らしい、まっすぐで心やさしい生徒達であった。

どの人も八十歳を越した。訃報は引きも切らない。なのに世界も日本も、思いもよらなかった新しい戦乱の音がする。私達はここまでの時間、何をどう学んだか、残る一日一日をどう生きるか、この世を去った先輩や友達から何をもらったか、あらためて考えてみたいと思っている。

対詠　ごきげんいかが？　PART 61〈2016 - 17〉

ＫＮＯ　小野澤繁雄
布宮　慈子
河村　郁子

海猫の餌付けやめたる加茂水族館　みなみの空に積乱雲わく　12月22日　N

訪れしつがる富士見湖に白鳥の飛来を告げる歌友（とも）を嬉しむ　12月25日　K

畑すみの枯れ枯れとする枝先に下って塊は綿かな白し　12月27日　O

畑には雪うつすらと南天の赤きが映ゆる歳末となる　12月30日　N

２０１７年

はつはるを迎へる庭の華やぎは千両万両万年青（おもと）の朱の実　1月2日　K

みちすがら鷺大神社なるに寄り詣でる人らみるついたちの朝　1月5日　O

汚れとも澱（おり）ともつかぬこれの世を覆へる白に重力失ふ　1月9日　N

大統領就任前の礼節を欠きたる言動　信頼できぬ　1月12日　K

夜に出てみしお星さんおの付かぬ星さんという人二人しる　1月15日　O

トランプの演説いかになさるるが話題となりて美容院出づ　1月20日　N

大統領就任演説に虚しかり Make America Great Again（メイク アメリカ グレイト アゲン）　1月21日　K

〈アメリカ（で）の殺戮〉というトランプに極端な言葉がある極端　1月23日　O

壊し屋か革命家なのか喧（かまびす）し渦の中心はドナルド・トランプ　2月2日　N

独占欲強きがゆゑの富裕層　国を独裁することならじ　2月4日　K

みちぞいの家庭菜園に一区画五番本格鶏も飼っている　2月8日　O

山形の家庭菜園きさらぎの雪に覆はれ春を待つなり　2月12日　N

春一番さなかの午餐は横浜港船上なれど航行中止　2月18日　K

砂山のようなる頂き宝登山は風に洗われ岩が出ている　2月19日　O

南より黄の花のメール来てをればじわじわと屋根の雪とかす雨　2月23日　N

沈丁花の花芽ふくらみ調ふもわれの心の備へ未だし　3月8日　K

かけっぱなしにしておくCD「ドン・ジョヴァンニ」に騎士長はすぐ殺されてしまう　3月9日　O

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

●晴天にめぐまれて鋏の音軽し月桂樹ひと本樹形ととのふ　丸山弘子

「月桂樹」が一連タイトル。さいしょの歌は「雨晴れて」で始まっているこんな歌、

雨晴れてつねより鵯の声透る若鳥らしき三羽ほど居り

晴れつづき。まず鵯の声からつねより透るという気付き、そこから若鳥らしき（三羽ほど）と展開される。月桂樹の歌でも、軽快な鋏の音から始まって一つの納得がやってくるようだ。丁寧なものいい。三、四首目では視覚に傾き（つはぶきの花、黄花菖蒲）、五首目では、それに人の姿が射す。そのあとでじぶんを詠う。作者像は明白だ。

いかほどの効果ありしや白内障を遅らせるとふ目薬をさす

●わたつみの青きはてよりひしひしと水惑星の力うち寄す　結城　文

号末の短信から、作者は、三週間ほどかけてエチオピア、モザンビーク、南アフリカ、ボツワナとアフリカを回ってきたらしい。移動にはヘリコプター、セスナ機、プロペラ機、と使う。そこがまずもって格別な旅だ。うたは「モザンビークの海」と題する一連、その二首目。「ヘリコプターに見下す海」（一首目）とあるので、鳥瞰する景。

空間が拡張された臨場感がある。エネルギーを感じている。次の歌にもあるが、輪郭の大きさが感じられる。

光増す頭上の半月暗き海の一つ灯りを見つつ食事す

●すりへりし母の軽石使いつつかかと擦りぬ今年の冬は　池田桂一

タイトル「北上行その後」通り、前半は沿線、トンネル、ホテル、といった言葉があるように、北上行きが詠われていて、その目的は「明日また文学館を尋ねんと思う」（四首目）というところだろうか。順直に詠む。その後の歌になる。

母親と風呂に入っていた頃は大体からだを洗ってもらっていた。風呂場には軽石が置いてあって、それをこどものじぶんはめでみていた。そのじぶんももう踵が乾きがちで、ひび割れてもいる。足を大事にしていられる暮しでもなかったろう。すりへりし、に思うものはあるはずだ。

●いいことをしたわねと言ふ婦人あれば動物病院にわが息ととのふ　布宮慈子

山越えのみち（車）で仔猫を拾う。仔猫は前足を咬まれたのか、腫らしている。折れてはいない（獣医師）。一つだけ開いていた動物病院でのやりとりがこの歌。切迫した心遣いがみえるような文体でもある。このあとの経過もある。

「二夜かがやく」がなかなか詠えないところ。束の間足元の濃密さ、それも含めて。

長き尾をたてて仔猫は付き来たり部屋から部屋へ尻尾はアンテナ

拾ひ猫もらはれゆけば足元の涼しくなりて二夜かがやく

前号作品短評B〈慈子〉

●吾(あ)がそばに在わす思いに拠りゆくは歌集『紅(べに)』にてそを開きたり　市川茂子

自分のそばにいらっしゃる気がして拠り所として頼るのは歌集『紅』なので、それを開いてみた、という。『紅』は布宮みつこの歌集。叔母・みつこは生前、作者と二人で勉強会をしていたようだ。作者はみつこを「先生」と呼んでいた。急逝から十二年過ぎて、悲しみや寂しさはいっそう深くなっている。

歌稿持ち逢いにゆきたる喫茶店よみがえりくる遥かなる日よ

●電柱のはり紙禁止（県警）は張り紙にして字の大きさに紙の小ささ　小野澤繁雄

ある、ある！　との発見を歌にするのは意外に難しい。花山多佳子に秀逸な一首がある。「爪楊枝のはじめの一本抜かんとし集団的な抵抗に会ふ」（『晴れ・風あり』）。掲出歌は「はり紙禁止（県警）」も張り紙でしょ？　というツッコミを事実だけで述べている。二句目の字余りも気にならない。さらに、小さい紙に書かれたデカい文字。この駄目押しも、権力をもつものの態度を妙に納得させてくれる。

●入口のテントの中の受付に住所と氏名と本人確認　河村郁子

今どきの運動会、見学するには手続きが必要。多くの人に来てほしいが、誰かわからない人はお断りという学校側の微妙な心理が見え隠れする。始まれば楽しさ満載の運動会だ。ふだん子どもと接することが少ない父親も何かを手に持てば居場所もあるというもの。客観視しながら、明るい持ち味が出ている。

身のまはりデジカメ、スマホにｉＰａｄしつかり構へる子育てパパたち

●天気予報の誤算うれしき秋日和　谷垣滿壽子

予報が当たらなくてよかったと、秋のよく晴れた天気を喜んでいる。次は、身体性の感じられる句だ。「さつとみて」は新鮮なものを選ぶ目や賢(さか)しさなど、あまりいいイメージではない。が、「黄なる唇(くち)」の鮮やかさが、人は所詮ものを食って生きているのだと納得できるのではないか。

さつとみて黄なる唇(くち)もつ秋刀魚買ふ

●釣瓶落し木彫りの蜮(いき)の動き出す　新野祐子

「瑞龍院にて二句」の詞書あり。瑞龍院は山形県白鷹町にある寺。江戸末期の建築で意匠的技術に優れ、地方棟梁・木彫師の技量を知る上で貴重なものだという。蜮(いき)は、水中に棲み人に危害を与えるという伝説上の怪物。「動き出す」の迫力。次の麒麟は、中国神話に現れる伝説上の霊獣。巨大な麒麟と季語の「小鳥来る」の対比がいい。なお、作者は今号から現代仮名遣いを用いている。

麒麟彫る腕(かいな)たおやか小鳥来る

エッセイ教室「清紫会」の作品より

目の前が変わる

市川茂子

新しい年の松飾りが取れたら、目の前の空家の取り壊しがはじまった。

一方通行の道路の真向いで、木造二階建てなので、最初は屋根の瓦を降ろして、二階からハンマーでこわしている。その残骸を道路に横付けにしたトラックに積みながらの解体作業をしている。

ビルやマンションの解体工事のような、騒々しい音が聞こえてこないし、夕方五時頃になると、さっさと引上げてゆく。いつの間にか、家がなくなってしまったという感じだった。

今まで住んでいた方とは否応なしに顔が合うので、何かと親しくなり、お互いにお茶呑みに行き来していた。ある時、お客さんの出入りが多いですね、と言われて、なんだか監視されているような気がした。戸を開けると、目の前に見える気色なのだから、自然に毎日の生活の動きがわかってしまうのだ。

今度は地盤固めの工事のようで、小型の重機が入って、ドスーン、ドスーンと、音がひびくようになって来た。その音の振動が道路の下を伝わって、こちらの地盤も振動するので、時々地震と間違えてしまう。

まだ建築の表示板が出ていないので、どんな建物になるかわからないが、しばらくの間は、工事現場にいるような騒々しい音がひびいてくる毎日になりそうだ。

目の前にどんな新しい姿が現れるだろうかと思いながら、早く完成してほしいと願っている。

年始がすぎて

小野澤繁雄

年始がすぎて日に日に寒くなってもきたが、ところで同時にその寒さにもようやく慣れてきたといった日々だ。ひざしがつよい昼間はとくに明るさを感じる。

日を次いで、昼と朝とにわずかの降雪があった。空高く巻きあがってゆく煙のような雲や、ベランダから手を延ばせば触れることができるくらいに近く、明暗のハッキリした雲があったりと荒天の方が空がきれいだったりする。

東側の川（市野川）のほとりは川が風の通り道になっていて、寒い日は寒い。このところは、南側の川（新江川、都幾川）の段丘上に、街歩きの場所を変えている。

晴れていれば、正面に富士山がみえていて、とくに年始には合うようだ。

そんなある日、新江川にむかって下り坂をくだっていたときのことだ。芭蕉句碑の案内標識がめにとまった。梨畑の角で、交差路だから案内が出ていたのだろう。

探し歩いてみたが、百メートルの間にはどうしてもみつからない。

ちょうど歩いてきた近所の人らしい女性に聞くことにしたが、目印になるもののない、何もないような畑みちだから、失礼ながら大雑把な云われようで、その通り探すしかない。

それでもうろうろした挙句、縁石にU字ブロックを置いただけの踏み台に、一段上がった梨畑の中、松の木が取り合わさって、腰高の（土台石付き、）石碑の所在はしれた。

それで、肝心の句だが、これが読めない。苔むしてと云いたいところだが、じぶんには、というか、読めない。説明も付いていない。

それでも、芭蕉ということでもあるし、（帰宅してから、）検索してみることにした。

名月の花かとみえて綿畠

句碑は、関根さんという人（梨畑の所有者だった人？）が、芭蕉の二百回忌を記念して建立したもので、建立した明治二十八年当時、このあたりは畑一面に綿花が栽培されていた、という。

この句（元禄七年、伊賀上野での作）は、余所でも句碑になっているようだ。句意は、これも引き写しながら次のよう。

広い綿畠一面に、熟しきった綿の実が白い綿を吹きだしている。それが明るく冴えた名月の光を浴びて、白い花かと疑われるほど美しい。

こういうことがある。俳句熱というのは一時期そうとうなものがあったようで、普通の人（？）が、句碑を建立していたりする。

ここに遠くない場所の、庭にウルトラマンを建てていた家があったことはしっているが。
じつはこのあとで、夕刻、ここに近い町内を歩いていて、綿の実が白く下がっているのをみたことがあって、これは一株だったが、夕闇にふあーとたしかに花が浮き出ているようだった。すぐに綿かなと思ったので、近い道沿いにいた女性に確認してもいる。
綿花、はテレビでみたことがあるかぎりで、綿は、学生の頃、港のバイトで艀（はしけ）から岸の倉庫に運びこむ作業をしたことはあった。畑でこんな風に綿の実をみるのは初めてのようだった。そこで、書いてみた歌、

畑すみの枯れ枯れとする枝先に下って塊は綿かな白し

明治中頃のこのあたり一面の綿畠を思い描いてみる。

「清紫会」だより

◆第149回　平成二十八年十一月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉林博子・背広の丈
◆第150回　十二月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・料理の本を見て／林博子・のすたるじあ／松井淑子・買い物帰りに
◆第151回　平成二十九年一月十九日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・目の前が変わる／小野澤繁雄・年始がすぎて

（松井）

無二の会短信

◆十二月の中ごろに、子供の居ない弟から、妻が台所で倒れ、救急搬送をして入院したと電話が入った。その後数日して、再起不能と告げられたと号泣する電話の弟をなぐさめる言葉もなく過ぎて、年末の二十九日、くも膜下出血で死亡の連絡で、一月三日通夜、四日に家族葬で行うことにした。年末年始で仏事は混み合っており不本意であったが何とか切り抜けることが出来た。又、四十九日葬は二月十五日であったが、お墓が福島市の信夫山の薬王寺なので山頂のため積雪があると車両は危険とのことで百ヶ日葬に変更となり、四月七日の埋葬で難題がようやく落着く結果を迎えるので安堵したところである。それから、母も、二人の叔母も七十九歳で他界。今年の八十歳の誕生日を過ぎて、やはりこの先は、諸事万端に難事が待ちかまえていることを考えると、今年をきっかけに、そろそろ終活を考えなくてはと、この一、二月を過ぎる間に決心の思いがはっきりしてきた。

池田桂一

◆年明けから晴天が続いている。朝八時頃になると部屋の中ほどまで陽が差してくるので、あわてて暖房を止めて、家猫のように陽を浴びながら仕事をしている。時間とともにかすかに動く光に、カーテンを閉めたり開けたりして加減していると、昼過ぎまでまぶしく陽は差しこんでくる。身も心も暖かくいられる日がいつまで続くかと思いながら、天気予報に耳をそばだてている。

市川茂子

◆米沢で一人暮らしをしている下の子は、余り来ない。車だと六時間はみなければ、という。いろいろ心配はあるが、雪のことをきく。一冬に一度くらい、ＮＨＫニュースに米沢が、それも市街地の雪降りが出る。雪が多いのに、車は走っている様子。聞いてみると、道幅が広いのだそうだ。冬には一車線が雪で使えないから、そうでないと困るようだ。年によって、億の単位で除雪費用を追加しなければならない、という。雪国で暮らしたことがないので、もっと聞きたいところ、大体に口が重く、雪も毎日となると話すこともないのかもしれない。

小野澤繁雄

◆今年も暖冬である。昔から正月に雪がない年は大雪にはならないと言われている。が、正月十日過ぎから毎日雪マークの予報が続いている。中国東北部から寒波が押し寄せてくると考えると、体にはあまりいい雪ではないような気がしてしまう。スノーダンプだの除雪機だの雪国ならではの出費が嵩む。雪国減税という制度でもあれば…だが、九州・沖縄の人からは台風減税でもという声が聞こえてきそうである。

神村ふじを

◆困っている。たまたまある本を読み出したら、メチャメチャ面白い。止まらない。日常がこのままだとストップする。本は池澤夏樹編集の日本文学全集・第八巻「日本霊異記」「宇治拾遺物語」その他の、作家三人による現代語訳。先週までこれらの古典に、私は知識も興味もなかった。翻訳とは横書き文章を縦書きに、あるいはその逆。条件は二つの言語と世界に熟達していること。単純な思いこみだった。言葉は化け物の森。まして古典の原作者も化け物。それなら訳者だって。メチャメチャの面白さもそこにあるのかも…。

河内愛子

◆昨年、晩秋の奥つがるの地を訪れた。昭和九年生まれの歌人の会の歌集研究会が行われたため、弘前の歌人たちとの交流も出来た。思いがけない歓待の数々を押しいただくばかりであったが、太宰治の『津軽』の中の一節を思い出した。故郷の級友を訪ね、Sさんの家で受けた歓待ぶりに「津軽人の私でさえめんくらった」と述べている箇所である。ご案内頂いた随所で聞き及んだ津軽の伝説に興味を持った。早速、『津軽の伝説3』坂本吉加著（北方新社）を手に入れた。沢山の由来や伝説に、津軽伝説には日本人の本来の心の幹細胞が残っているとさえ思って読み継いでいる。

河村郁子

◆この冬は、次から次へと寒波に見舞われ続けていましたが、皆様には恙なくおすごしでしたでしょうか。暖冬になれていた身には、大変堪えております。それだけ年をとったということかもしれないと思っております。春が来るのを待ち遠しく思います。

谷垣満壽子

◆郷里山形に戻って三十五年になるが、この小正月、初めて「ヤハハエロ」（どんど焼き）作りに参加した。「ヤハハエロ」は地域の公民館が主催して盛大に行われている。まず、十一月に萱（かや）を刈って保管しておく。当日、中心部の田んぼに役員が集まって、約五メートルの竹を四本、天辺をまとめるようにして立てる。その中に、正月に使った松やお札、豆殻、藁、身拭き紙などを入れ、全体を萱で覆う。さらにその上をとば（藁で編んだもの）で巻いて、出来上がり。手際よく作る男たちに見とれてしまった。夕刻、皆が集い点火するのだ。父が老いて地域の役が私に回ってきたが故に知ったこと。もっと早くからわが地域の伝統行事に関心を持つべきだったと、悔やむことしきりである。

新野祐子

◆正月明け早々に、友人がころんで大腿骨（だいたいこつ）を骨折し、入院した。独り暮らしで近くに親族もいないところから、ほかの友人たちと手分けして、入院・手術の保証、医師の説明を聞く、入院に必要なものを買いに走る、洗濯物を受け持つなどひどく忙しい思いをし、くたびれ果てた。だが心苦しそうにしている友人を見ると、疲れた顔も見せられず、頑張っている。

松井淑子

◆冬にかぎらないが、最近の天候不順にはついてゆけない。ことしは鳥取県の雪がすごい。現在は東京に住んでいるが、鳥取県出身の友達に電話をかけ、様子を聞いてみた。子供のころの記憶にも、ことしのような大雪は思い出せないと言っていた。それに、雪とは直接関係はないが、連絡をとり合うような知り合いも少なくなって、ふるさとも遠くなってしまったわ、とのことだった。

丸山弘子

◆4月から、ハルは新札幌駅に近い中学に通う。それを機に、私たちは新札幌に居を移すことにした。私は、流浪の民のような性質を持っているのだろうか。新しい街、新しい仕事、新しい住まい。二人ならどこででもやっていける、なにしろモンゴルでも母子暮らしだったのだから。そして私は、どんな環境でもまじめに働いて、いい歯車になれる。そう呟き、クスッと笑う。三月で五十歳。

山内裕子

◆平成十六年に発足をした「昭和九年生まれの歌人の会」の地方研究会を、青森にお住まいの中村キネさんのご尽力で、昨年十月末にもつことができた。中村さんご本人のほか、家族の方々、歌の友人の方々もご一緒に愉しく実りある会と旅であった。その上長勝寺は、会員の須藤まさえさんの嫁ぎ先の寺ということで、懇切なお話を聞きながら拝観させていただいたのであった。

結城　文

編集後記

◆「展景」同人だった鈴木京子さんのエッセイが冊子として出来上がった。別プロジェクトとして、はやばやと印刷の見通しが立ったのはありがたかった。協賛してくれた方々に感謝申し上げる。

◆新庄は、山形県内でも雪の多いところである。新庄市に旧農林省「積雪地方農村経済調査所」（以下「雪調」）の庁舎の一部を保存・復元したものがあることを知った（「gatta!（フリーマガジン・ガッタ）」二〇一七年二月号）。昭和十二年、民俗学研究者で民家の研究をした今和次郎により設計・建築されたトンガリ屋根の庁舎は「克雪」を考えてデザインされていて、今も魅力的に映る。その発端は、昭和初期に「雪は災害なり（雪害）」と唱え、雪害克服運動を積極的に展開した松岡俊三代議士（一八八〇～一九五五）にある。運動が実って「雪調」が設置されると、東畑精一や中谷宇吉郎、柳宗悦など、錚々たるメンバーが集められ、さらに冬期の仕事を生み出すため、陶芸家・濱田庄司、染色工芸家・芹沢銈介、建築家・ブルーノ・タウトなども関わっていく。画期的な「雪調」の取り組みだったが、戦争が始まり日本全体が戦時体制になっていくと活動は停滞していったという。詳しくは「gatta!」のウェブサイトを見てほしいが、この動きが続いていれば今の雪国の農村はどうだったかと思わずにはいられない。☞ http://www.okaze-gatta.jp/feature/2544

◆一風変わったところがあった。「展景」を主宰していた布宮みつこのことである。みつこは私の叔母（父の妹）にあたる。叔母は小さいころから体が弱く、大人になってからも漢方や民間療法、腹式呼吸、自彊術など、体にいいとされるものはすべて体験していたのではないか。教師を続けられなかったのも、立ち仕事がつらいという理由だった。東京に出て編集の仕事についたときは、座ってできる仕事がある！　と思ったそうである。もうひとつ、人生の岐路に立ったとき占いや姓名判断に頼ることがあった。もちろん信頼できると思った人に意見をきくわけだが、それだけ悩みが深かったのかもしれない。

私の「慈子（やすこ）」という名はペンネームである。「安子」がもともとの名前。親が付けてくれた名前に、いいも悪いもない。が、私が小学生のころ、叔母に「名前をひらがなで書いたほうがいい」と言われた。画数に難あり、ということだった。ふーん。おばちゃんの言うことだからそうするか、くらいに思っていた。いま考えれば、二歳で父親と死別した私を案じてのことだったろう。さらに、私の人生に激動が訪れたとき、叔母は巣鴨に連れていった。たしか地蔵通りにある家だった。その家の二階に上がっていくと、年配の婦人がいて、その人に生年月日や名前を書いて渡したのだと思う。なにやら資料に当たってしばらくすると「愛」と「慈」の漢字が示された。どちらも「やす」という読み方があるらしい。私は「慈」を選んだ。その場で決まったのが「慈子」。とにかく仕事運はあるという。三人でちょっと笑った。ふーん、そんなものかと少しさめていたが、「きょうから自分の名前だと思えるまでノートに何回も書くように」と言われて帰ってきた。せっかく叔母が骨を折ってくれたのだからと、私はその名前を使うことにした。三十数年前の話である。そのお陰かどうかはわからないが、当面の仕事は見つかり、その後も仕事を続けることができて、なんとか生き延びてきた。人にも恵まれた。もしかしたら、ほんとうに運のいい名前だったのかも！　叔母が亡くなってから十二年になる。これからも、ありがたくこの名前を使わせてもらうことにしよう。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 85号
二〇一七年三月十二日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright© 2017 MUNINOKAI. All rights reserved.